

# 連珠っておもしろい

九段 河村典彦

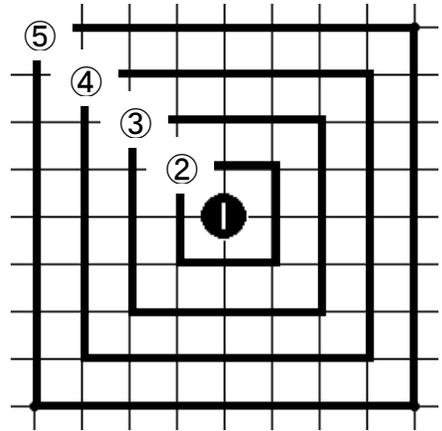
● 第119回 ●

## 新しい開局規定②

17年前のこの場所で、新しい開局規定についてご紹介した（珠友258号）。今回再度書く必要が出てきた。と言うのも、RIFではまたしても新しい開局規定を採用しようとしているからだ。具体的にはタラグチ10になるのだが、いきなりその説明をしてもわからないだろうから、まずはベースとなるタラニコフの説明からしてみよう。

まずは図のように1〜5で打てる範囲は決まっています、図のように1手ずつ打てる範囲が1路広がっている。なので最初の3手は珠型の範囲内になる。

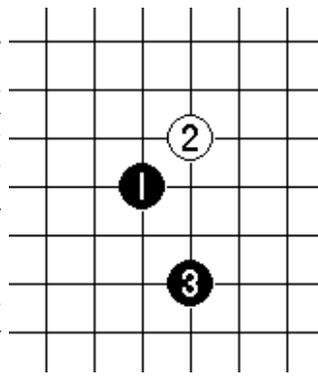
タラニコフルールとは、直前に打たれた相手がその



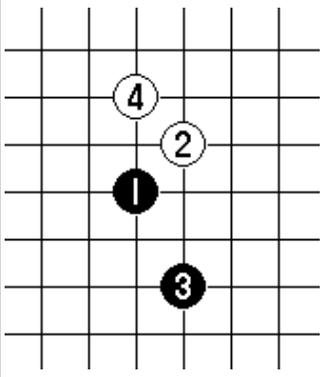
次の手をそのまま相手に打たせるか、自分が打つかを決めることができるというもののである。そして5手目を打たれた相手が最終的に黒白を決め、あとは通常のルールで行うというやり方である。1手ごとに交代権が発生すると思ってもらえばよい。もっと簡便化するために3手目までは仮先が打ち、交替を3回にする方法もあるのだ、今回はそれで実戦の想定例を示してみたい。

これも珠友に書いたのだ

が、10年ほど前に欧州選手権に出場したことがあり、ロシアのタラニコフ氏と対局したことがある。その局を見てみよう。



私が仮先で黒3まで打って様子をみた。ここでスワップして私が白4を打てるなら、名月共通として私が知識ある局面に誘導できる。それは不利と見てタラニコフ氏はそのまま白4を打つ



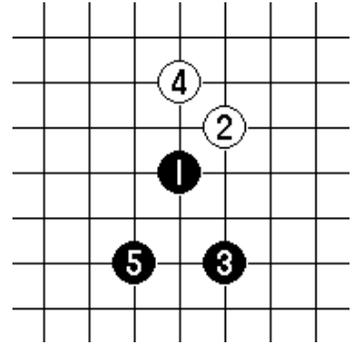
た。（スワップせず）

この白4は初めて見たのでう〜ん悩む。この対局がソーソロフルールなら例えれば六題と宣言されることになる。黒を持って六題は時間がいくらあっても足りないし、白を持って相手に黒六題をスラスラ打たれて実が全部黒勝ちだった、なんてこともあるかもしれない。ここでの悩み方がソーソロフとタラニコフでは大きく違ってくる。

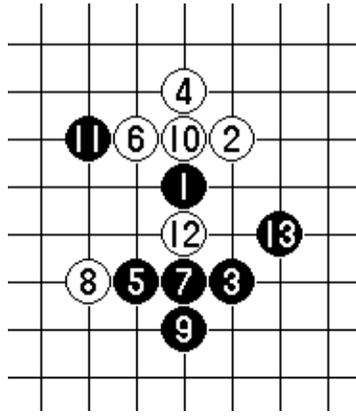
タラニコフはここで黒白互角の黒5を見つけても良いし、相手に打たせてそこで考えることもできる。一般的には相手に打たせて最後に考えた方が得なので、相手に黒5を打ってもらったことにした。つまり、スワップすることになる。

注目目の黒5は反対の桂馬の位置だった。ぱつと見れば黒勝ちでは？と思っただが、その理由は、怖い白6なら黒追い勝ちに見える

たからである。

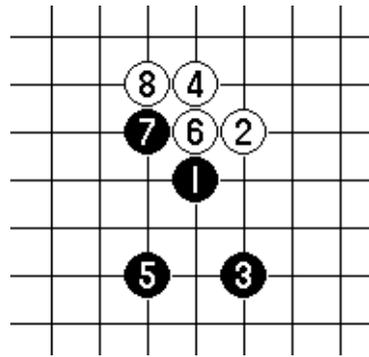


図はその怖い白6とは、次の



白6と構えられても黒7とズバツと引いて黒9と引けば、白10と取られても黒11で取り返せる。これが見えたので再度スワップして黒番を確定させた。これを

記録用紙で書くとは、3黒河村<sup>4,5</sup>タラニコフとなるだろう。ソーソロフでは題数と候補を書く必要があるが、タラニコフではそういう記載も不要なのでそういう意味でもかなりシンプルになる。

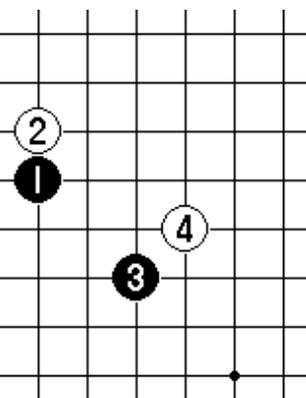
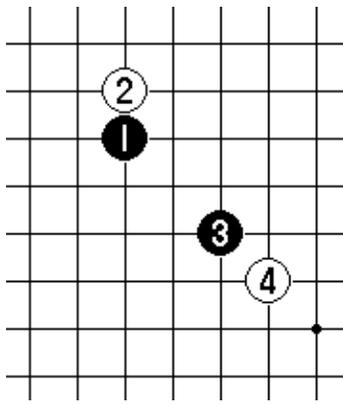


結局、本局は白6、8と打たれ、相手の研究範囲に入ってしまったようで、以下白勝ちになっている。

タラニコフなどの五珠交替打ちが導入されると、脚光を浴びるのがやはり難珠型とされる珠型である。かなり白4を遠くに打てるので、これまで見たことがな

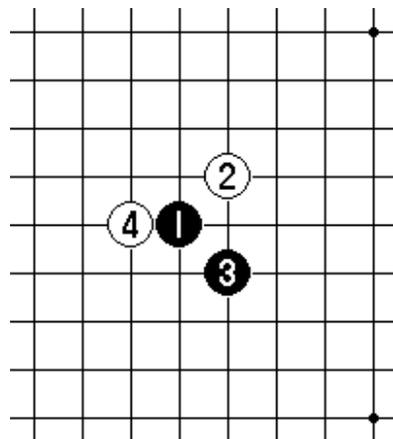
い形になりそうであるため、事前の研究が大事になってくる。

例えば遊星はソーソロフになってからかなり研究したが、



こんな白4までスコープに入ってくる。その他奇想天外な白4が他の珠型でも出てきそうである。また、

簡易珠型でもソーソロフでは八題でもカバーができたものもタラグチ10ではかなり出現する可能性がある。



浦月白4なども10題ぐらい打てそうなので打ってみたい。その他の珠型でも10題ぐらいの白4は結構あるので、これまでに以上

事前の作戦が重要になる。今のところ五珠交替打ち以上の開局規定はなさそうなので、しばらくはこの規定で進んでいくことになるだろう。ただ、いつの時代も結局は強いものが勝つという図式には変わりがない。